



Title	第9回公衆衛生大阪大会開かる : 万国博をめざしてより健康な街づくりを……
Author(s)	
Citation	大阪公衆衛生. 1966, 18, p. 28-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84447
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

レポート 公衆衛生大阪大会

第9回公衆衛生大阪大会開かる

万国博をめざしてより健康な街づくりを……

第9回公衆衛生大阪大会は大阪府、大阪市、堺市の後援を得、去る9月21日午後、大阪府中小企業文化会館大講堂で、府内の公衆衛生従事者、地区組織活動者など約400名が参加して開催した。

大会は梶原公長のあいさつで始まり、公衆衛生事業功労者表彰、来賓祝辞のあと、パネルディスカッション「公衆衛生面からみたまちづくり」が開かれた。

パネルディスカッション

「公衆衛生面からみた街づくり」

——万国博を4年後にひかえて——

このパネルディスカッションは本大会開催のために設けられた3つの分科会の討議の内容を総括発表し、併わせて会場からの討論を交えてまちづくりの問題点を多面的に検討するもので、司会は本協会副会長で府公衛研の古野秀雄所長、演者に中山信正（大阪市衛研所長）、井田直美（池田保健所長）、小川静子（東淀川保健所）、島崎惇（大阪府医師会）、岩井豊明（大阪府精神衛生相談所長）、小松志づ（大阪厚生年金病院）の諸先生方を迎え討論を展開した。

各分科会からの発表内容は次のとおり。

—— 第 1 分 科 会 ——

「生活環境面からみたまちづくり」で、9月の13日、大手前会館で分科会を開いた。生活環境をよくするための努力はあらゆる方面にわたるが、大阪府のように急速に都市化しているところでは、尿尿の合理的処理が真先

に取上げられねばならない。このためには ①各家庭毎の浄化槽、②団地、あるいは町村単位のコミュニティ・プラント、③都市ごとの公共下水道の3つの方法がある。大阪府下では大阪市をはじめ公共下水道の事業が各地で行なわれており、寝屋川、猪名川の流域下水道は着手されている。公衆衛生に従事するものの立場からあるいは地域住民の立場から尿尿処理の合理的解決を一日も早く達成するために、その重要性を強調。

—— 第 2 分 科 会 ——

「保健と福祉の面からみたまちづくり」で、9月14日、大阪府職員会館で分科会を開いた。この分科会の席上発表されたある保健婦の訪問記録は、大阪のいたるところですすめられている「まち」の外形のあわただしい移り



パネル「公衆衛生面からみた街づくり」

変りのなかで、まだまだ満たされない生命をやっと支え合って生きている老人や子供たちが無数にいることを指摘した。家がない、子供の遊び場がない、老人のいこいの場が少ない、公害が発生する、生活が苦しい等々、いま進められている「まち」づくりは健康を守るどころか健康の破壊すらともなうことがある。自分たちの生活や健康を守るためには主婦をはじめとするあらゆる層の人々の力を大きく結集しなければならない点を強調。

＜ — 第 3 分 科 会 — ＞

「精神衛生の面からみたまちづくり」で、9月13日、大阪府職員会館で分科会を開いた。この分科会は人生を幼年期、青年期、老年期の3つの時期に分けて考え、それを貫く精神衛生行政という4つの立場から検討した。幼年期の問題として、住宅、商業、工業、農山村地域ごとの3才児の調査を行ない家庭内習慣形式について地域的な相違を検討、青年期の問題としては、事業所の精神衛生管理の現況と精神障害者の治癒後の職場復帰について検討、老年期の問題としては、老人の社会への有機的なつながりをどう保つかを中心に検討し、さらに精神衛生行政の面では、患者の医療保障の現況、保健所における精神衛生業務などを中心に問題を検討した。

最後に3つの分科会から提起された問題は個々の家庭生活をとりかむ広範な領域を占め、いずれも現在の公衆衛生の基本的な問題でもある。より住みよい「まち」を形成するための条件として、着実にとりくむ意欲的な姿勢が大切であるという司会者のしめくりでこのパネルディスカッションを終った。

公開座談会

「よりゆたかな生命の充実を」

続いて公開座談会「よりゆたかな生命の充実を」に移った。この座談会は万国博を4年後に控え、万国博のサブテーマのひとつである「よりゆたかな生命の充実を」をいかにして具現するかを話し合うもので、司会を本協会の梶原三郎会長、それに、広瀬智生（万国博覧会協会業務部運営課長）、水川孝（大阪大学医学部教授）、小松左京（作家）の三氏を招き、各々の立場からの発言を交えた。



座談会「より豊かな生命の充実を」

この座談会での各氏の発言内容は大体次のとおりであった。まず万国博覧会協会の広瀬氏からは万国博覧会の役割、性格についての説明で、「回を追うに従ってその内容が変化している万国博は初期の産業博覧会的なものよりだんだん文化博覧会的なものにかわり、さらに現代では民間の文化交流の場として、人間全体を語るといった傾向が強まってきている。万国博の性格としては、産業見本市的な面、知識啓蒙的な面、娯楽的な面の三つが考えられる」と述べられた。

次いで作家の小松氏からは、「公衆衛生面の事業についても、平素できないことを博覧会を契機にやるということ、夢のある理想的なものを博覧会に出品することとははっきりと分けて考えるべきだ、むしろ理想的なものをこの際考えるべきであろう」との発言があり、阪大の水田教授からは「来たるべき社会のある姿、夢の社会とはどんなものなのか、夢をもった社会生活を築くために、その条件として、上下水、住宅など現在で可能な最高のものをつくりだしたい。そのためには他力本願ではなく、まず自分自身の身の辺の整理からはじめるのも一つの方法だ。みんなで美しいまちづくりをするという気持を万国博の精神的モニュメントとして培いたい」という発言があった。司会の梶原会長からは、「『世界に示そう健康大阪』がどこまで実現可能か、5年後までにどこまで達成できるか、現在の日本でどこまでできるのだということを示していただきたい」ことなど発言があり、座談会は地味な話し合いのなかにも万国博に対する建設的な討議に終始した。

会はこのあと参加者全員の賛意のもとに大会宣言を採決し、幕を閉じた。